

特集 愛媛県美術館「俳文学と美術」コレクション(二)

— 寄託の阿部里雪コレクション

長 井 健
岩 本 成 美

愛媛固有の視点で当館のコレクションの特徴を考えた時、「俳文学と美術」というキーワードを挙げることができる。本県松山市出身の文学者・正岡子規(一八六七〜一九〇二)が、西洋由来の「写生」⁽¹⁾を対象をよく観察し、客観的な描写によって真実に到達しようとする思考を文学に取り込むことで、近代俳句は完成されたが、それに伴い、俳文学と美術との結びつきは、新たな広がりとも深まりを形成していった。

前稿(一)では、当館コレクションの中から、俳文学にまつわる絵画・書跡作品一三七点を取り上げ、各作家たちの特徴や思考などを考察したが、本稿は、その続編として、当館に寄託されているうち、最も大規模でユニークな内容を持つと言える、本県出身の俳人・阿部里雪(一八九三〜一九七三)の旧蔵品について取り上げるものである。

里雪は、明治二十六年(一八九三)、伯方島(現・今治市伯方町)に生まれた。本名は利行。大正二年(一九一三)、柳原極堂(一八六七〜一九五七)が経営する伊予日日新聞社に入社、廃刊翌年の昭和三年(一九二八)、極堂を追って上京し、五百木飄亭(一八七一〜一九三七)が主宰する雑誌『日本及日本人』の記者として活動。そのかわらで極堂や村上霽月(一八六九〜一九四六)らに俳句を学んだ。また極堂主宰の俳誌『雞頭』の編集にも、同七年(一九三二)十月の創刊以降従

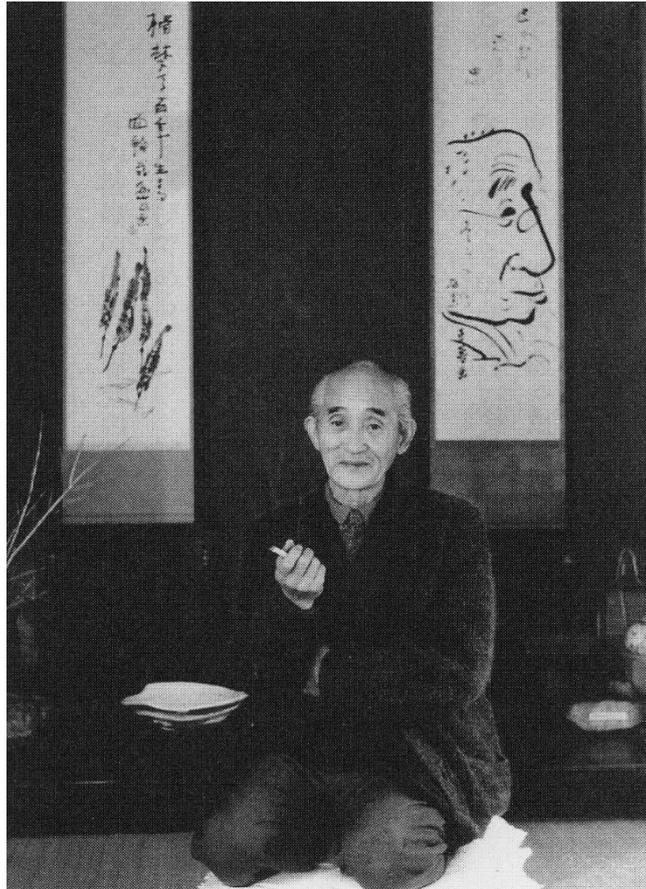
事した。同十九年(一九四四)、故郷の伯方島に戻り、町の教育委員や公民館長として尽力。戦後は「愛媛俳壇の生き字引」として子規及び門人たちの顕彰活動や後進指導に努めた。その集大成的著書が昭和三十六年(一九六一)に刊行された『子規門下の人々』である(2)。昭和四十八年(一九七三)没。

詳しくは後述するが、旧蔵品からは、俳人以外にも愛媛出身の画家たちとの交友も盛んだったことがうかがえる。大正期新興美術運動の立役者の一人である柳瀬正夢(一九〇〇〜四五)は盟友とも言える存在だったのをはじめ、長谷川竹友(一八八五〜一九六二)、坂田虎一(一九〇六〜二〇〇〇)、石崎重利(一九〇一〜九六)などいずれも郷土の重要作家ばかりであり、本コレクションは今後の愛媛の近代美術史研究上においても、高い価値を有するものと言える。以下、コレクションの概要及び主要な作品について解説紹介することとした。

(長井)

(1) 長井健、岩本成美、土居聡朋「特集 愛媛県美術館「俳文学と美術」コレクション」『愛媛県美術館研究紀要』第二号、二〇二四年

(2) 愛媛タイムス社刊。二〇〇四年に愛媛新聞社より『新編 子規門下の人々』として再刊された。



阿部里雪

背後の床の間に柳瀬正夢《柳原極堂像》が掛けられている。

『新編 子規門下の人々』(愛媛新聞社、2004年)より転載。

阿部里雪コレクションの概要

寄託の経緯

現在当館に寄託されている里雪の旧蔵品は約二〇〇件に及ぶ。これらの一部は、里雪の著書『子規門下の人々』において引用紹介されていて、里雪の所蔵であることは以前より関係者には知られていたものであった。平成二十五～二十六年（二〇一三～一四）に北九州市立美術館、神奈川県立近代美術館葉山との共同企画で開催した展覧会「柳瀬正夢一九〇〇―一九四五」において、柳瀬と俳句との関わりを紹介するにあたり、柳瀬が最も親交の深かった俳人として里雪に焦点を当てることとなった。松山子規会の烏谷照雄氏（現・同会長）とともに、里雪の遺族宅に調査にうかがった結果、柳瀬はもとより郷土の画家たち、俳人たちの膨大な作品・資料群を確認するところとなり、柳瀬の作品については、展覧会で拝借紹介することができた。展覧会終了後、旧蔵品全体としての資料的価値の高さを鑑み、調査で確認できた約二〇〇件が一括して当館に寄託されることになった。

コレクションの内容

里雪コレクションの内容は、俳人と画家の作品に大きく二分できる。俳人については、詳しい経歴が調べられていない人物も一部含まれるものの、いずれも里雪と直接交流した人々と推測される。俳人では、里雪の師であった極堂のほか、高浜虚子（一八七四～一九五九）、河東碧梧桐（一八七三～一九三七）、内藤鳴雪

長 井 健

（一八四七～一九二六）を筆頭に数多くの師友たちの作品や書簡等が確認でき、画家でも、下村為山（一八六五～一九四九）のような子規直系の作家はもちろんのこと、前述した柳瀬正夢、長谷川竹友、石崎重利など『ホトトギス』関連の仕事（表紙絵、挿絵）を手掛けた作家たちや、子規周辺の俳人たちと親密な交友をした塩月桃甫（一八八六～一九五四）などで占められる。彼らは、いわゆる「子規山脈」と呼ばれる、子規（およびその門人たち）の周辺に集った個性豊かな人々と重なる面々であり、それはそのまま里雪の著書『子規門下の人々』に登場する面々でもある。従来、里雪は俳人としてというよりも、記者・編集者としてその立ち位置や人物像が認識されるのが主であった人物だが、『子規門下の人々』に加えて、本コレクションを合わせ見ること、絶大な信頼の下、まさしく「子規山脈」を支えるべく、さまざまな人々を繋ぐ役目を果たし、広く深く愛された存在であったと捉えることができるだろう。

中でも特筆すべき俳句関係の資料としては、子規の直筆による未発表句の短冊および虚子の書簡が挙げられる。前者（図1）は、「湯の町の門を閉たる余寒哉」という句が書かれたもの。前述の調査時に協力いただいた故・和田克司氏（当時・大阪成蹊短大名誉教授）は、幼名の「升（のぼる）」を用いていることから、子規がごく親しい人、おそらくは同い年の柳原極堂に贈ったものを、極堂の弟子であった里雪に譲ったものと推測されている（1）。「余寒」は立春後に残る寒さをあらわす季語で、道後温泉（道後湯之町）で感じた肌寒さが表現される。和田氏は、子

規に先立って極堂が上京する明治十六年（一八八三）頃、二人で訪れた道後の情景ではないかとされた。のち同二十八年（一八九五）九月から十月にかけて、子規は日清戦争従軍後の病氣療養のため松山へ戻るが、その際、夏目漱石や極堂らと松山とその近郊を散策して吟行し、それらを『散策集』としてまとめた。そこには、道後を訪れて作った俳句が多く収められていることから、本句もこの頃の作と考えるのが妥当と思われる。

後者の書簡は、複数が含まれるが、そのうち極堂と里雪に宛てて書かれた大正十四年（一九二五）六月七日付の書簡（図2）は、新発見の内容であった。「愛媛県下の俳人の名簿が出来るのは、私に取って親しくなつかしい事である。（中略）独り子規居士のミならず、鳴雪翁はじめ我等に至るまで、此地を誕生地としてをる。其土地の俳人諸君の名簿は、恰も家族の名簿、親類の名簿をいつてい、ものである。」などと記され、調査分析を依頼した虚子記念文学館の小林祐代学芸員によれば、伊予日日新聞社で発刊予定だった愛媛県内の俳人名簿の出版広告のための文章を虚子に依頼した際の返信ではないかと推測されている⁽²⁾。

柳瀬正夢の作品群

愛媛ゆかりの画家たちの作品については、岩本別稿にて詳しく紹介するので、そちらに譲るが、ここでは特に交友が深かった人物として、柳瀬正夢の作品群について触れておきたい。なお、柳瀬と俳文学との関わりについては、前稿などでも取り上げているので、こちらも参照されたい⁽³⁾。

松山市出身の柳瀬は、十代から精力的に作品発表を行い、目覚ましく活動した。二十代には、読売新聞社でジャーナリズムの仕事を手がけたほか、大正期新興美術運動やプロレタリア美術運動に加わり、漫画やグラフィックデザインなどにも活躍の場を広げた。昭和七年（一九三二）治安維持法違反容疑での逮捕を経て、再び油絵を描く。同二〇年（一九四五）五月に新宿駅で空襲に遭い四十五歳で死去。

大正期から昭和戦前・戦中期にかけて、油彩画、グラフィックデザイン、諷刺画、漫画、写真、絵本など多方面にわたって先駆的な活動を展開したが、俳句については、絵筆の取れなくなった第二次大戦時下において、集中的に取り組まれたものであった。その中で、里雪に句作の手ほどきを受け（その代わりに柳瀬が里雪に絵を教えていたらしい）、里雪は、柳瀬が愛した信州の山々にちなんだ「蓼科（りょうか）」という俳号を与えている。さらに柳瀬は、里雪の師である柳原極堂にも師事し、その句会にたびたび参加していた。極堂主宰、里雪編集により昭和七十七年（一九三二）に出版された俳誌『雞頭』の最後の二年分の表紙絵を柳瀬が担当。あわせて柳瀬は同誌へ三百もの投句をしている。

柳瀬と里雪の出会いは、これまで、昭和九年（一九三四）九月に田端の大龍寺で行われた正岡子規の三十三回忌の際であったと推測されていたが⁽⁴⁾、その三か月前に柳瀬が里雪に宛てた葉書が新たに見出され⁽⁵⁾、そこには「例の会はどうなつてゐますか。そのうちどっかで飲ませう」という親しげな記述があることから、両者の出会いは遡る可能性がある。里雪は、同八年（一九三三）に汎文社という出版社を立ち上げ、虚子、極堂、碧梧桐、飄亭らの執筆協力を得つつ、子規顕彰に関する編集・出版を行っていた。柳瀬は二十代の出版ジャーナリズムの仕事の中で、『ホトトギス』『土上』といった子規周辺の俳人たちが関与した俳誌の挿絵を断続的に担当したり、瓢亭が編集長をつとめていた雑誌『日本』で数か月間漫画を描いていることから、子規門下の俳人たちとはすでにこの頃から接点があったと推測され、里雪との出会いは、彼らがつないだものであったと考えられる。

昭和十一年（一九三六）六月には、柳瀬は里雪に誘われて、東京在住の愛媛県人会である「一莖会」の例会に参加したが、『子規門下の人々』に収録される「一莖会の思い出」という随筆に記される。同会は勝田主計（大蔵・文部大臣）、水野広徳（元海軍大佐）、高橋龍太郎（通産大臣）ら政財界人を中心に、極堂、飄亭、碧梧桐、為山といった子規門下の俳人たちも参加したサロンの集まりで、メンバーによる作品展も開催されたようである⁽⁶⁾。なお、岩本別稿で取り上げている「花

月」と題された扇面型画帖の各画面の作者は、一茎会メンバーと重複する顔ぶれが多いことから、同会に関連した創作物の可能性も考えられる。

里雪コレクションには、十点ほどの柳瀬作品が含まれ、いずれも淡墨や水彩といった即興的なタッチによるものである。後年（一九三〇年代以降）に訪れた中国各地、満州やロシアで見たであろう風俗などを描いた掛軸（図3、4）は、この時期の彼の重要な作例と位置付けられるほか、里雪本人や彼の家族の似顔絵などを描いた色紙（図5、7）は、二人の親密さが強くうかがえる。また、極堂の横顔を軽妙かつ大胆に捉えた掛軸（図8）には、極堂自筆による「己か影愚なりと思ふ冬こもり」という句が書き添えられており、まさしく「俳画」として見事な出来栄えを見せる佳品である。また、里雪と親交のあった俳人や画家たちの書画が貼り交ぜられた二曲屏風（図9）にも、柳瀬の作品が1点（図10）含まれるほか、極堂、虚子、為山、石崎重利ら前述した作家たちや、里雪とは郷里が隣接する野間仁根（一九〇一〜七九）の作品も見える（7）。

なお、里雪は昭和十九年（一九四四）に疎開のため帰郷、柳瀬とはその後再び会うことなく、翌年五月の柳瀬の死とともに交友も終焉を迎えたと見られる。翌六月に極堂のもとへ、柳瀬死去の知らせが遺族から届き、極堂は里雪へ葉書で伝えていた（8）。

註

- (1) 二〇一五年七月九日付愛媛新聞において、里雪コレクションおよび子規の本句についての紹介がなされ、和田氏が取材に応えたもの。
- (2) 二〇一五年九月十九日付愛媛新聞において、前掲(1)の記事の統報的に掲載された。それに当たり、小林氏が取材に応えたもの。
- (3) 拙稿「柳瀬正夢と俳句―画家として、俳人として」『柳瀬正夢一九〇〇―四五』展図録、読売新聞社、美術館連絡協議会、二〇一四年
- (4) 長井健、岩本成美、土居聡朋「特集 愛媛県美術館「俳文学と美術」コレクション」『愛媛県美術館研究紀要』第二二号、二〇二四年
- (5) 柳瀬信明「柳瀬蓼科」『山の絵 柳瀬蓼科句集』私家版、二〇〇七年
- (6) 展覧会「柳瀬正夢一九〇〇―一九四五」で公開。同展図録二九九頁（no.315-18）に図版掲載。
- (7) この作品展のものと考えられる柳瀬デザインによるポスターが、武蔵野美術大学美術館・図書館に所蔵される。
- (8) 野間も、自ら多くの俳句を詠んだ愛媛の画家として重要である。
- (9) 拙稿「野間仁根の文人性について―昭和一〇―二〇年代の動向を中心に」『愛媛県美術館研究紀要』第五号、二〇〇六年
- (10) 「本日東京柳瀬正夢君宅より計報届く 正夢君五月二十五日夜戦災死とあり 宅ハ焼けて居らぬらしいから想ふに出先きで罹災せしものかと被存候 実ニ痛嘆ニ堪え不申候（中略）柳瀬計報ハ貴方へも入りしこと、は存候へとも為念御知らせ申上候」一九四五年六月十三日付阿部里雪宛葉書『柳原極堂書翰集』極堂会、一九六七年

図1
正岡子規《湯の町の門を閉たる余寒哉》

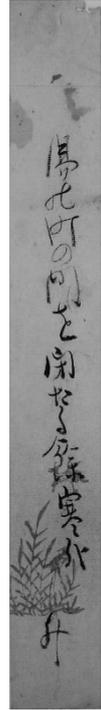
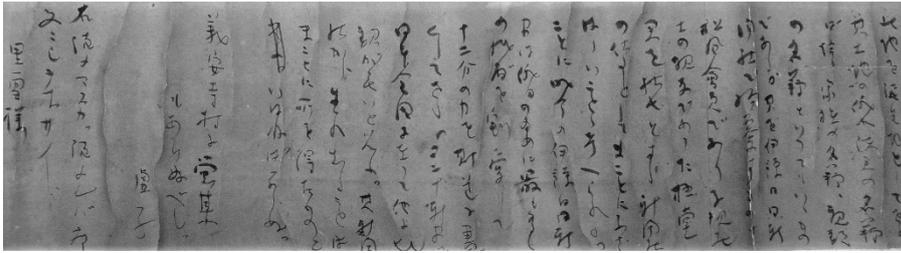


図2
高浜虚子《柳原極堂・阿部里雪宛書簡 大正14年6月7日付》



図5
柳瀬正夢《〔阿部里雪像〕》

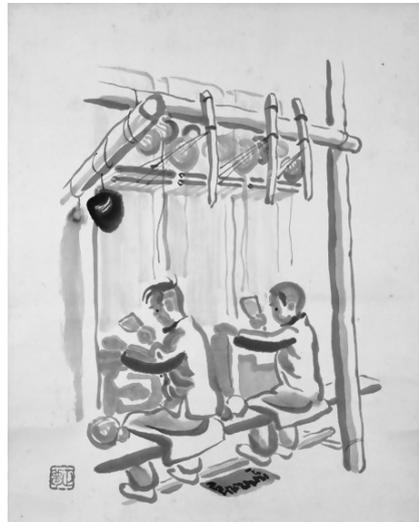


図4
柳瀬正夢《〔機織〕》



図3
柳瀬正夢《〔中国人物等〕》



図7
柳瀬正夢《〔阿部里雪子息像〕》



図6
柳瀬正夢《〔阿部里雪夫人像〕》

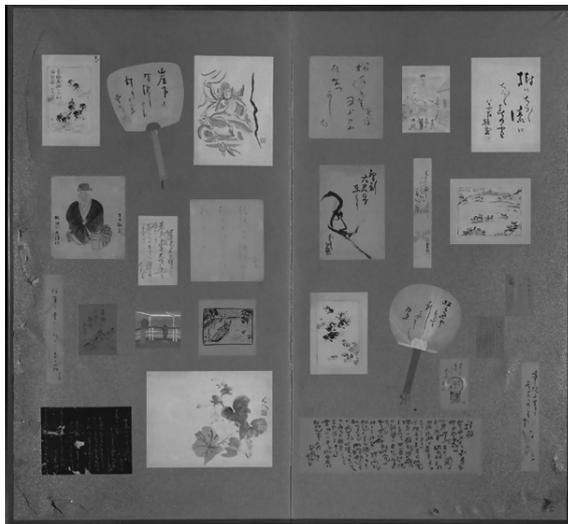


図9
貼交屏風



図10
柳瀬正夢《〔仏像〕》
(貼交屏風のうち)



図8
柳瀬正夢《〔柳原極堂像〕》

阿部里雪コレクション 作品紹介【日本画家ほか】

岩 本 成 美

はじめに

本紀要の長井別稿においては、阿部里雪コレクションの概要および柳瀬正夢の作品を中心に紹介したが、続く本稿では、同コレクションにおける郷土の日本画家の作品の一部を紹介する。今回は「俳文学と美術」のテーマから、俳画ほか、絵画作品を中心に取り上げる。なかでも長谷川竹友と下村為山の作品については、作品点数の多さや里雪ほか俳人たちとの関わりを示す作品が多くみられることから、それぞれの章を設けて紹介することとした。

(一) 長谷川竹友 はせがわちゆう 明治十八年(一八八五)～昭和三十七年(一九六二)

本コレクションに含まれる長谷川竹友の作品は、絵画や俳画、磁器など、その形状において多彩である。

竹友は温泉郡拝志村下林(現在の愛媛県東温市重信)の生まれ。本名は武次郎。十三歳にして画家を志し京都に移り、都路華香に学ぶ。明治四十二年(一九〇九)から大正五年(一九一六)にかけては東京に居住しており、この間に高浜虚子と知り合い、同四年(一九一五)から昭和十五年(一九四〇)にかけて、俳誌『ホトトギス』にて挿絵および裏表紙絵を手掛けるようになる。大正五年にシンガポール、インドを旅行。中国へは同十一年(一九二二)以来、何度も訪れている。訪れた土地の風景や人々の様子を写生に残し、それらを基にした作品を『印度所感

作品画集』(大正十一年刊)や展覧会「支那漫遊所見展覧会」(大正十二年)等で発表している。里雪コレクションにおいても、《画(支那)》(図1)や《画(上海)》(図2)などの作品が含まれている。愛媛県においては、大正十一年(一九二二)に伊予美術展の委員を務めたほか、愛媛美術工芸展、愛媛美術展等に参加。昭和二十七年(一九五二)の愛媛県美術会(県展)発足の際には名誉会員に推薦され、晩年まで出品を続けた(1)。

作品紹介

以下では、里雪コレクションに含まれる竹友の作品をいくつか取り上げ、簡単ではあるが解説を加える。阿部里雪コレクションに含まれる竹友の作品を大きく分類すると、まず色紙しきしや半切に、墨画または墨画に淡彩を施した絵画、続いて俳人との合作による俳画、そのほか、里雪の肖像画、竹友による絵付けが施された磁器などが挙げられる。

《画(雛)》ほか(墨画淡彩/色紙または半切・軸)

コレクションには、半切と色紙の作品が各八点数えられる。色紙のサイズはいずれも27・0×24・2cmサイズで、それぞれ草花や果実、動物、郷土玩具などが描かれている(図3～6)。描法としては柔らかな筆致と淡い色彩が共通して指摘される。半切においては、《画(雛)》(図7)や午の絵馬や玩具を集めて描いた《画

（午）（図8）など、季節にまつわる事物を題材とした作品がみられるほか、高砂や昇龍、旭日など、縁起物とされる題材を描いた作品も見られる。

柳原極堂・長谷川竹友《句画「秋日和」》（墨書・墨画淡彩／半切・軸）（図9）

柳原極堂（一八六七～一九五七）が句を書き、竹友が画を描いた合作。句「秋日和家あるべしと待ちにけり」に、親兔の元に子兔たちが身を寄せる様子が描かれる。「秋日和」の句を扱った極堂と竹友の合作は、コレクション内にもう一点みられ、ここでは竹友がしいたけを描いている。

柳原極堂・長谷川竹友《句画「春風や」》（墨書・墨画淡彩／短冊）（図10）

《句画「秋日和」》と同じく、極堂の句と竹友の画の合作。箔を散らした短冊に、極堂の「春風やふね伊豫によりて道後の湯」が書かれる。この句は、道後放松園の句碑に刻まれている句としても知られる。竹友は、松山城の画を描く。

阿部里雪・長谷川竹友《句画「尾を刎ねて」》（墨書・墨画着色／半切・軸）（図11）

里雪と竹友の合作。里雪が句「尾を刎^はねてこのよかくれの鯉職」を書き、その下側に竹友が五月人形の画を描く。軽い筆致で描かれた墨線に淡い色彩が施されている。

阿部里雪・長谷川竹友《画「阿部里雪像」》（墨書・墨画／半切・軸）（図12）

竹友による里雪の肖像画。墨で里雪の横顔が描かれている。肖像の上側に里雪が記した回想によれば、終戦直後、里雪が故郷の伯方島を題材にした絵葉書の制作を企画し、そのために、竹友に一年間ほど同島に滞在してもらったことがあった。この肖像はその時に描かれたものであるという。

角皿ほか十六点（図13）

角皿十点、瓢箪型皿五点、湯吞一点で構成される。絵付けを竹友が手掛けている。角皿は縦11cm、横13・5cmほどの大きさで、深緑色の皿の上に茶褐色の皿を重ねたようなデザインがなされている。表面の絵に注目すると、角皿十点のうち五点は、海浜や山の風景が描かれ、五点は子規の句に画を添えた、俳画のような形式がとられている。書かれている句は、「温泉の町に紅梅早き宿屋かな」「草花や露あたた、かに温泉のながれ」「松山や秋より高き天守閣」「春や昔十五万石の城下哉」「若鮎の二手になりて上りけり」で、いずれも子規の句である。句を書いた人物は定かではないが、おそらく竹友であると思われる。

瓢箪型の皿も、角皿と同様に深緑色と茶褐色の皿を重ねたようなデザインが施されている。大きさは縦9・7cm、横15cmほど。表面には海浜や山々の風景が描かれる。

湯吞は、直径7・5cm、高さ6・5cm程度。線刻と着色によって絵柄が付けられ、その裏側には子規の句「萬歳や黒き手を出し足を出し」が刻まれている。「萬歳」とは民俗芸能の一つであり、新年に家々を訪問し、玄関口や座敷にてめでたい言葉述べものである。烏帽子を被り、扇を持つ場合が多く、本湯吞にはこの衣装を身に着けていると思われる人物が刻まれている。

（二）下村為山 しもむらいざん 慶応元年（一八六五）～昭和二四年（一九四九）

為山は伊予国温泉郡の松山藩士の家に生まれた。十七歳で上京した後、本多錦吉郎の画塾彰枝堂、そして小山正太郎の画塾不堂舎にて洋画を学び、明治美術会主催の展覧会に作品を出品するなど、洋画家として評価を得る。

明治二十三年（一八九〇）に、従弟の内藤鳴雪（一八四七～一九二六）を通じて正岡子規と知り合い、後に句作を始める。俳号は「牛伴」ぎゅうばん「冬邨」とうそん。

明治三十年（一八九七）に松山で創刊された俳誌「ほと、ぎす」では中村不折

らと共に挿絵を手掛け、翌年創刊の東京版「ホトトギス」でも、創刊号の表紙絵および口絵をはじめ、多数の挿絵を寄せている。明治終わり頃より、日本画、特に俳画の研究に専念した⁽²⁾。

為山は『子規門下の人々』にて紹介される人物の一人である。本書では里雪が為山の東京の自宅を度々訪れていたことなどが綴られており⁽³⁾、二人の交流の深さが窺える。

作品紹介

コレクションにおいては、俳画のほか、子規庵での句会の様子を描いた作品、俳人との合作による扇面帖などがみられる。

下村為山《句画「櫛焚て…」》(墨書・墨画／半切・軸)(図14)。

句「櫛焚て百年生きる面輪哉」に、串焼きの川魚の画が描かれる。句画ともに為山が手掛ける。為山は六朝体の書を研究していたことが指摘されており⁽⁴⁾、本作における角ばった書体から、その影響をみることができるといえる。その上で、一文のバランスをあえて崩した手法や、筆圧の緩急などに独自性が表れている。

河東碧梧桐・下村為山《句画「桐の花…」》(墨書・墨画／半切・軸)(図15)

河東碧梧桐(一八七三～一九三七)と為山の合作による俳画。為山による睡蓮に、碧梧桐の句「桐の花咲く山畑の朝の吹きおろしなる」が書かれる。『新編 子規門下の人々』における、里雪の解説によれば、本作は為山の画に碧梧桐が句を賛として書いたものであるという⁽⁵⁾。墨の濃淡を活かした、枯淡な趣の睡蓮の画と、碧梧桐の書の組み合わせが味わい深い作品である。碧梧桐は、子規より「天資の才」と称賛されるほど書を得意としたが、中村不折から中国の六朝時代の書の拓本を送られたことをきっかけに、柔らかな書風から、六朝体を取り入れた角ばった書風へと変化していく。さらに、大正五年(一九一六)ごろからは、しなやかさの

加わった本作のような書風へと展開した。

内藤鳴雪、河東碧梧桐ほか《花月》(扇面画帖)(墨書・墨画着色／画帖)(扇面型)(図16～19)

内藤鳴雪、河東碧梧桐、五百木瓢亭らによる画帖。俳句または俳画が書かれた、半径17cm、横幅26・5cmほどの扇型の画面十三面から構成される。十三面のうち俳画は、内藤鳴雪による「七轉八起のそれも花の春」の句に達磨が描かれた作品のほか、為山の作二点を数える。為山の俳画のうち、一つは「清水受けて踊る桐子也渦乃中」に金魚と蓮の花が描かれている。もう一つは「暮る、日乃たゆたふ音□□る□けり」の句に、葉をつけた植物と羽を有する虫(もしくは花か)が描かれる。為山の俳画はいずれも彩色がされている。

下村為山《画(子規庵句会写生図)》(墨書・墨画／懐紙・軸)(図20)

東京の根岸の子規庵にて開催された句会の様子を、為山が回想して描いた作。画面左上に、「昭和十年八月十六日」の日付が記されている。左上にはこの句会は三十七、八年前のこととの記述があり、先述の日付から逆算して、明治三十年前後に開催された句会の光景であることが分かる。座椅子に腰掛ける子規を左上部に、碧梧桐、薺月、鳴雪、虚子ら俳人たちの姿が描かれ、また為山自身の姿もみられる。(福田) 把栗がかくし芸を披露しようとして転んでしまった様子を人々が笑って眺めている。子規句会の和気あいあいとした様子を活写した作品であるが、それと同時に、全員の姿を描き分け、名前を付してみせた本作では、生涯にわたり膨大なスケッチを描いた為山の観察眼とスケッチの蓄積の成果が発揮されている。

(三) その他の作品

以下では、個別の作品について挙げ、若干の解説を加える。

石崎重利『松山名所図絵』（紙本木版）（図21～23）

石崎重利（一九〇一～一九九六）は、温泉郡中島町（現在の愛媛県松山市）の生まれ。日本画を学んだ後に大正十年ごろより木版画の制作を始める。日本創作版画協会展、帝展等で活躍。昭和二十年（一九四五）より忽那島に居を定める。愛媛県美術展（県展）の第一回目より版画部門の審査員を務め、昭和四十七年（一九七二）からは、愛媛県美術会の名誉会員となる。

『松山名所図絵』は、全七点から構成される版画集。重利と里雪は、同時期に東京都大森区（現在の東大田区）に居住した為に交流を深めたという。本作は重利より自身の版画を販売したいとの相談を受けた里雪が、松山の名所を題材にすることを提案したことで制作されたという。さらに里雪は、版画に、子規門下の俳人たちの句を賛として加えることを勧め、承諾した重利に俳人を紹介した⁽⁶⁾。版画の題材となった場所と、添えられた句は次の通りである。

松山城／高浜虚子「しろ山の鶯來啼く士族町」

三津の朝市／河東碧梧桐「生きのいきざかな一度躍つて尾とばん刃」

新立橋／五百木瓢亭「そゞろ來て橋あちこちと夏の月」

道後／柳原極堂「春風やふね伊豫によりて道後の湯」

石手／たけし「坐るあり寝そべるがあり遍路宿」

高濱／寒川鼠骨「岐曾つりの舟を漕ぐ見ゆ涼志良に」

鹿島／村上霽月「蒼海に生えて幾世の島の秋」

作品はいずれも、縦25cm、横34cmの紙に摺られており、摺りを重ねることによって生まれた、三津の朝市の朝焼けや、夕日を反射する高浜の海面などの鮮やかな色彩が目を引く作品である。また松山城は城の中から眺めた風景を取り上げるな

ど、構図もユニークである。

内藤鳴雪『句画「敷島や…」』（墨書・墨画着色／半切・軸）（図24）

内藤鳴雪（一八四七～一九二六）は、松山藩士の家の生まれ。明治初めには、愛媛県内の小・中および師範学校の設立に尽力する。東京にて、松山出身の学生たちの宿舍常盤会の監督として勤務した際、寮生であった正岡子規の影響により四十六歳より俳句を始める。

本作は、句「敷島や和歌にもりし六の花」の周囲に、六歌仙が描かれた作品。本作については、制作の場に居合わせた里雪による回想が残されている。里雪が、東京の鳴雪の自宅を訪問した際、鳴雪に希望の画題を尋ねられたため、六歌仙を描いてほしいと答えると、それに応じて里雪の目の前で即興で描かれたという⁽⁷⁾。

坂田虎一『句画「若き日も…」』（墨書・墨画淡彩／半切・軸）（図25）

坂田虎一（一九〇六～二〇〇〇）は、愛媛県川之江市（現在の四国中央市）の生まれ。大阪信濃橋洋画研究所にて学び、大正十四年（一九二五）に上京して牧野虎雄に師事。帝展、文展、日展にて作品を発表した。昭和二十一年（一九四六）に帰郷し、宇摩美術会の設立に携わったほか、光風会など県内の美術団体にて作品を発表。また後進の育成にも尽力した。阿部里雪コレクションには、虎一の俳画二点がみられる。その他、魚や植物などを墨画に淡彩で描いた色紙や、油彩による阿部里雪の肖像も収集されている。

酒井黙禪・塩月桃甫『句画「湯の山の…」』（墨書・墨画淡彩／半切・軸）（図26）

酒井黙禪（一八三三～一九七二）の句「湯の山のうしろ或の□雪の峰」に、宮崎出身の画家、塩月桃甫（一八八六～一九五四）が画を描いた俳画。入浴する女性の持つ手ぬぐいには、道後温泉の湯玉のマークが描かれている。

酒井黙禪は、東京大学医学部を卒業後、高浜虚子の率いる東大俳句会に所属し

た後、虚子に師事する。大正九年（一九二〇）、日赤松山病院に院長として着任し、医師としての勤務と共に、松山において俳句の指導や俳誌の選者として活躍。伊予俳諧文庫の資料収集にも尽力したことも知られる。道後温泉の近所に居住していた黙禪は、毎日、時には一日に二回、道後温泉に入浴していたという。また、昭和三十年（一九五五）には、温泉の歴史や文学との関わり、著名人の来歴などを記した書籍『道後温泉話題』を刊行する。

塩月桃甫は、宮崎で師範学校を卒業した後に東京美術学校にて絵画を学ぶ。大正期に台湾に渡り、台湾美術展の創設に携わったことで知られるが、それ以前に松山市で愛媛師範学校にて勤務しており、黙禪とはその時期に知り合ったと考えられる。

むすび

ここまで阿部里雪コレクションについて、日本画家が手掛けた作品を中心に紹介した。本コレクションの作品群は、里雪が画家や俳人たちとの合作や、里雪の求めに応じて制作された作品など、里雪が作品を収集するのみならず、作品の制作にも深く関わっていたことを示している。本稿で紹介することが叶わなかった作品についても、今後情報の整理を進めていきたい。

註

- (1) 長谷川竹友の略歴は、以下を参照した。烏谷照雄編『セキ美術館開館10周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第2期展 大正から戦前の昭和激動の時代美を求めた画家たち』図録、一一六頁。
- (2) 下村為山の略歴は、以下を参照した。松山市立子規記念博物館編『第26回特別企画展 画家 下村為山』一九九二年。阿部里雪『「新編」子規門下の人々』一八七頁。データベース『えひめの記憶』—生涯学習情報提供システム (<https://www.i-nanabi.jp/system/regionals/regionals/ecode4/87/view/14691>)。
- (3) 阿部里雪『新編 子規門下の人々』愛媛新聞社、二〇〇四年、一九一—一九四頁。
- (4) 鴻池楽斎「書家 下村為山」松山市立子規記念博物館編、前掲書、九十三—九十四頁。
- (5) 制作の経緯については下記を参照。阿部里雪、前掲書、七十六頁。
- (6) 制作の経緯については以下を参照。阿部里雪、前掲書、一八一—一八三頁。
- (7) 阿部里雪、前掲書、一一二頁。



図4

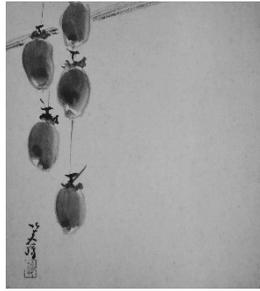


図3



図6

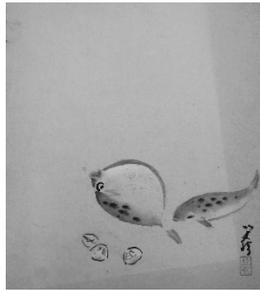


図5



図2



図1

右から順に

- 図3 長谷川竹友《画（干し柿）》
- 図4 長谷川竹友《画（姫だるま）》
- 図5 長谷川竹友《画（河豚）》
- 図6 長谷川竹友《画（枇杷）》

右から順に

- 図1 長谷川竹友《画（支那）》
- 図2 長谷川竹友《画（上海）》



図11

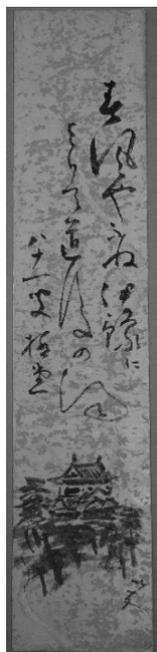


図10

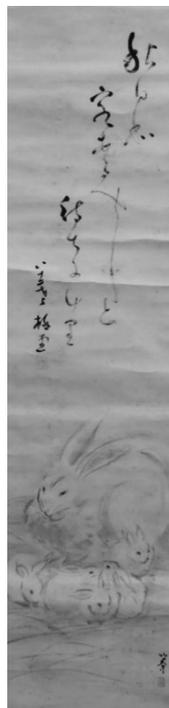


図9



図8



図7

右から順に

- 図9 柳原極堂・長谷川竹友《句画「秋日和…」》
- 図10 柳原極堂・長谷川竹友《句画「春風や…」》
- 図11 阿部里雪・長谷川竹友《句画「尾を刎ねて…」》

右から順に

- 図7 長谷川竹友《画（雛）》
- 図8 長谷川竹友《画（午）》

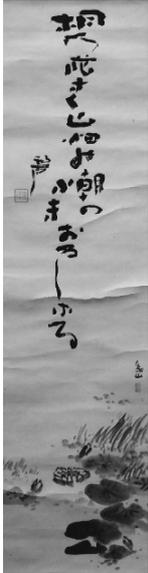


図15
河東碧梧桐・下村為山
《句画「桐の花…」》



図14
下村為山
《句画「楳茨て…」》



図13
長谷川竹友ほか《角皿ほか十六点》

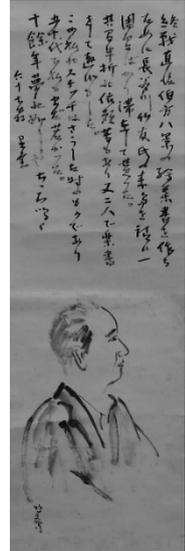


図12
長谷川竹友・阿部里雪
《阿部里雪像》



図17 内藤鳴雪《句画「七轉八起の…」》



図16 《「花月」(扇面画帖)》(表紙)



図19 下村為山《句画「暮る、日乃…」》



図18 下村為山《句画「清水受けて…」》



図20 下村為山《画(子規庵句会写生図)》

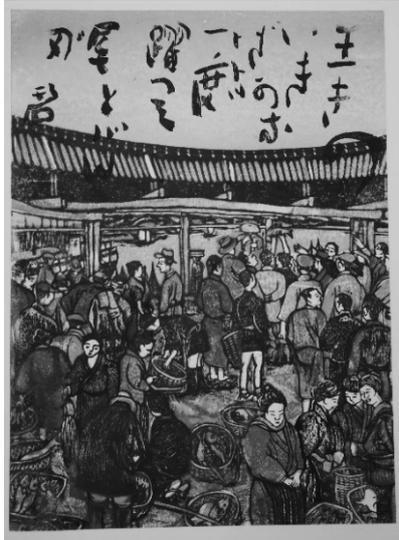


図22 石崎重利「三津の朝市」



図21 石崎重利『松山名所図絵』「松山城」

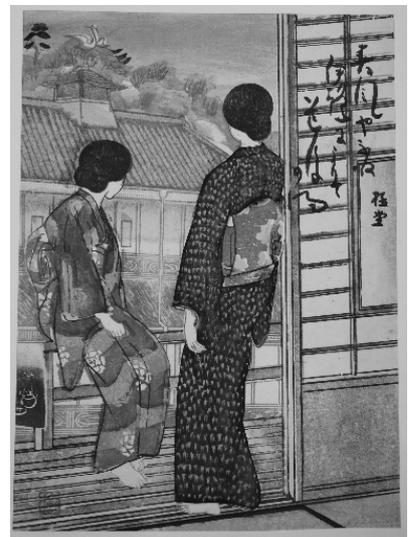


図23 石崎重利「道後」



図26



図25



図24

図24 内藤鳴雪《句画「敷島や…」》

図25 阿部里雪・坂田虎一《句画「若き日も…」》

図26 酒井黙禅・塩月桃甫《句画「湯の山の…」》